

Vol. **135** 2016.7.22

理事長トーク Top Interview

介護事業を通しての社会貢献

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男



今年度から健育会グループ介護事業の管理職を対象に、本部研修を開催することとしました。
1回目の研修は、7月19日から4回に分け実施し、全体で100名以上が参加する予定です。



健育会グループは1953年の竹川病院設立から始まり、その後1997年より介護事業に取り組みはじめました。当初は慢性期医療の延長として介護事業に取り組んでいましたが、今や介護事業はグループの大きな柱のひとつとなりました。そのような中、介護独自のMVVの必要性を感じ、2012年に介護事業のMVVを策定しました。

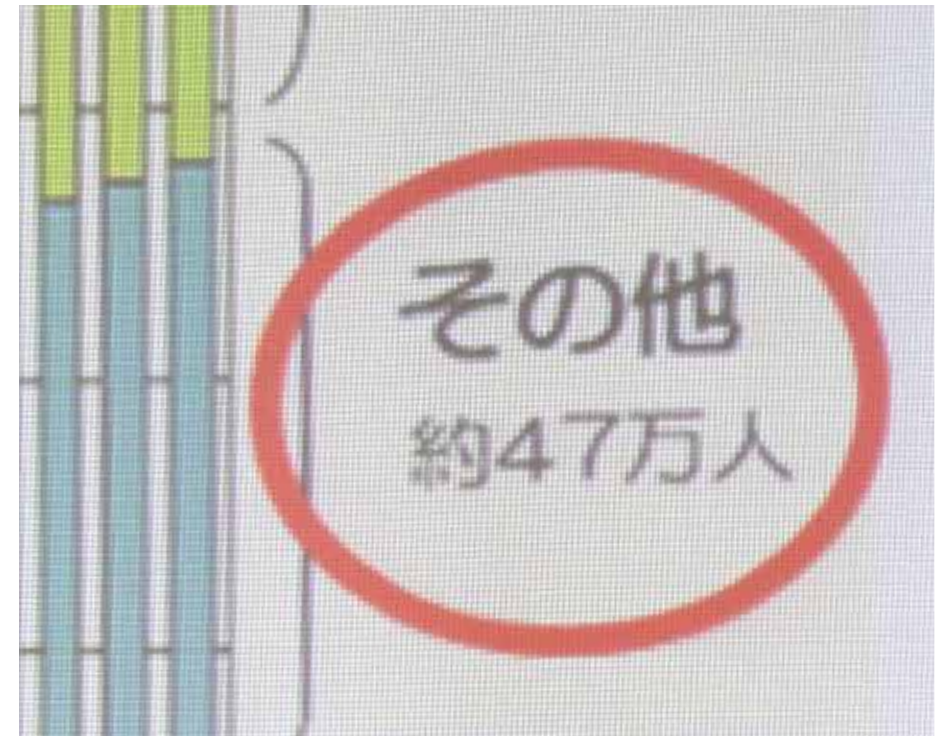
この介護事業が成長していく中で、それに携わる管理職の皆さんと改めて介護事業におけるグループの目指すべき方向を共有し、社会に貢献していくために今年度より、私から直接皆さんにお話する機会を設けました。

今回の理事長トークでは、この研修で私が話をした概要をお伝えしたいと思います。

日本が抱える問題

日本はすでに高齢社会ですが、このままだと私は日本の社会は活力がなくなってしまうと危惧しています。若い方々は、自分たちが一生懸命働いても、自分たちの老後に不安を感じています。また、親の老後の面倒をどうするのかと悩んでいる人もいます。

また、日本が抱える問題の一つとして「**看取りの場**」があると思います。2030年の予想を見ると、看取りの場として「医療機関」「自宅」「介護施設」の他に、「その他」の人数が47万人となっています。この47万人は誰にも看取られず、人知れずに亡くなる方の人数です。例えば、有名な俳優さんの孤独死などがニュースに取り上げられる等がありましたが、最近では孤独死があまりニュースならなくなっています。それは、孤独死が無くなったからではありません。むしろ、増加して当たり前になったからです。ニュースというのは当たり前になるとニュースバリューが無いのです。



その他に、自分の両親、旦那さん、奥さんの介護のために、せっかく働いている場所を離職しなければならない「**介護離職**」の問題も顕在化しています。介護離職が増えていることの状況を踏まえ、2015年9月に安倍総理が「介護離職ゼロ」という目標を掲げました。

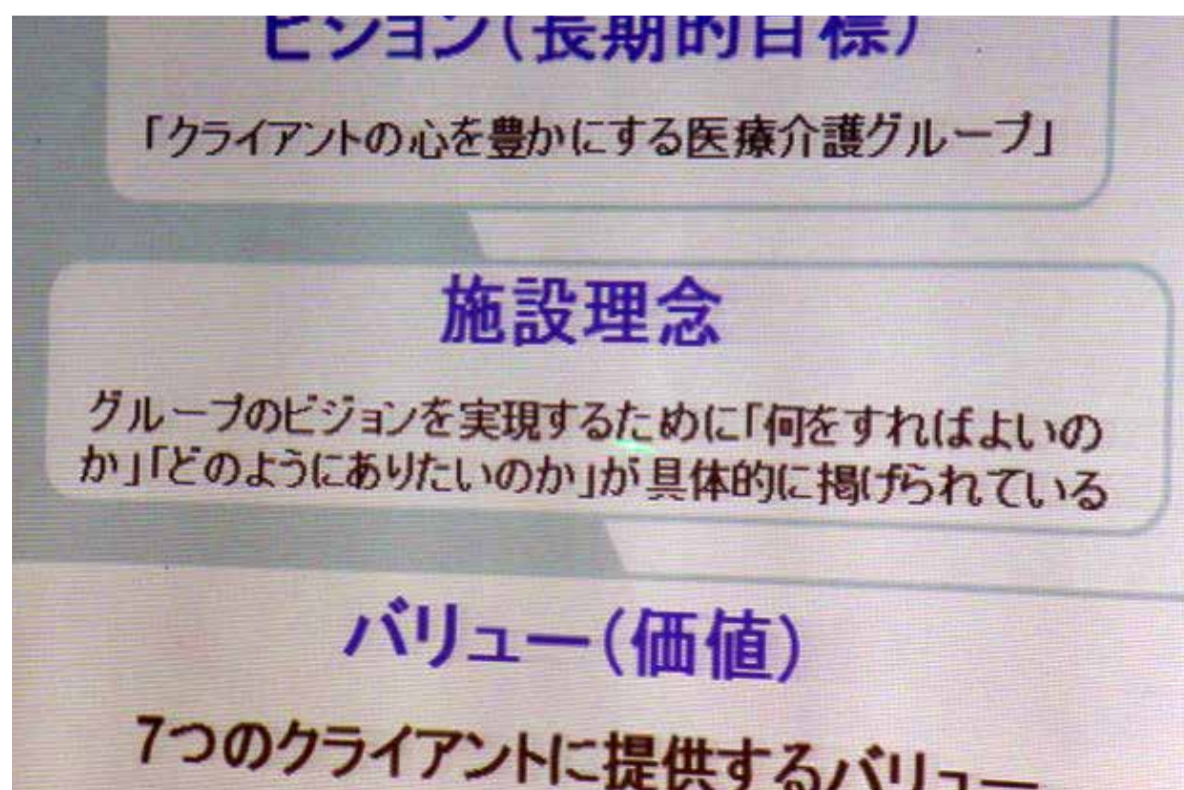
日本の介護を取り巻く現状は、このように様々な問題を抱えています。私たち健育会グループは、日本人がこのような問題を心配しなくてもよい社会、日本がいつまでも活力ある社会であるために、**介護事業を展開**していきたいと考えています。



施設理念の重要性

私たちが世の中に貢献していくという高い使命を掲げたとしても、グループのそれぞれの施設が提供する介護サービスの質が良くなかったり、また、不祥事を起こしたりしたらどうでしょう。誰もそのような施設に家族を預けようとは思わないし、自分も入りたいとは思いません。やはり身近に素晴らしい介護施設があって、「家族を将来そこに預けられる」、あるいは「自分も将来、そういう施設に入りたい」と思っていただけで信頼感と安心感が生まれるのだと思います。ですから、一つ一つの施設がそのような素晴らしい施設になることが大切です。では、どうすると素晴らしい施設になることができるのでしょうか。皆さんの施設にはそれぞれの「施設理念」があります。その**施設理念を実現していくことで、素晴らしい施設に近づいていくことができる**はずです。

大切なことは、**施設理念からイメージする「目指すべき姿」**が、働く職員全員の中で**一致すること**です。健育会グループでは、昨年から「理念の映像化」を進めていますが、これは職員の皆さん一人一人が、目をつぶった時に「同じ目指すべき姿」を描けるようになるために、取り組んでいます。これが一番大切なことだと思っています。



あえてその反対の例をお話しします。

私の知人に、公立病院に勤めている医師がいます。その公立病院は患者さんがとても多く、外来も朝8時から夕方16時までに行っているにもかかわらず赤字で、新しい設備投資も行えない状況だそうです。皆さん一生懸命働いているのに、このような状況になるのはなぜでしょうか。それは、働いている職員がそれぞれ勝手に良いと思うことをやっていて、そのベクトルが一致していないからだと思います。目指すものが一致できていないと、すべてが非効率になってしまい、経営状態の悪化につながり、結果として患者さんにご迷惑をかけてしまうのです。

それぞれの施設の皆さんが、施設理念をしっかりと理解して、理念の実現に向かって行動することが「**効率的な経営**」つながります。そしてひいてはクライアントの心を豊かにし、クライアントに期待される価値を与えることにつながるのです。

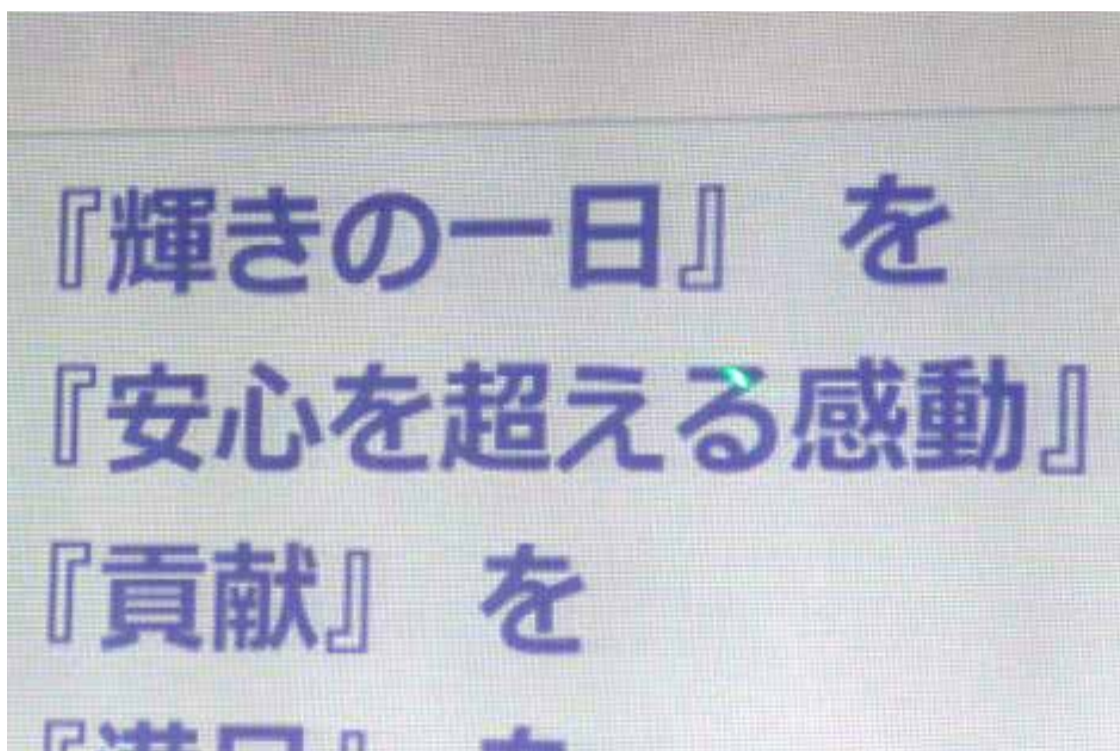


クライアントから期待されている価値

素晴らしい介護施設は、「クライアントから期待される価値」を提供できている施設であると言えます。これが、MVVのバリューにあたります。

医療との一番の違いは、「ご利用者には『輝きの1日』を」としていることです。医療の場合は、質の高い医療によって病気を治すことが一番ですが、介護では、「この日1日を輝けるように」と、充実した日々の点を繋いでいくことが重要です。

「ご家族には『安心を超える感動』を」としています。施設に預けることができ安心と思われるご家族は多いと思いますが、施設に来たら「家にいる時よりも輝いている」と思っていたできるように、介護に取り組んで欲しいと考えています。



「職員には『やりがいと成長の場』を」としています。これは、皆さん自身も、そして皆さんの部下にも実感してもらえるように関わって欲しいと思います。

また、「社会には『希望』を」と掲げていますが、これは高齢化社会になっても希望があるという社会を私たちは提供していきたいという思いを表現しています。介護事業を通して社会に貢献するというのは、究極的にはこのようなことだと思っています。

日本の介護は進んでいる

日本の医療は、平均的にはレベルは高いですが、高度先端医療については他国に遅れをとっているところもあると感じています。しかし、日本の効率的な介護は、世界の中でも群を抜きます。これからアジア各国の高齢化が進んでいく中で、日本の介護のノウハウは海外に輸出できると考えています。将来、私たちのグループから、外国に指導に行ってもらう方が出てくるかもしれません。数年後、そのようなことも現実になると思いますので、ぜひ実現した場合には名乗りを上げてほしいと思います。



皆さんへの期待

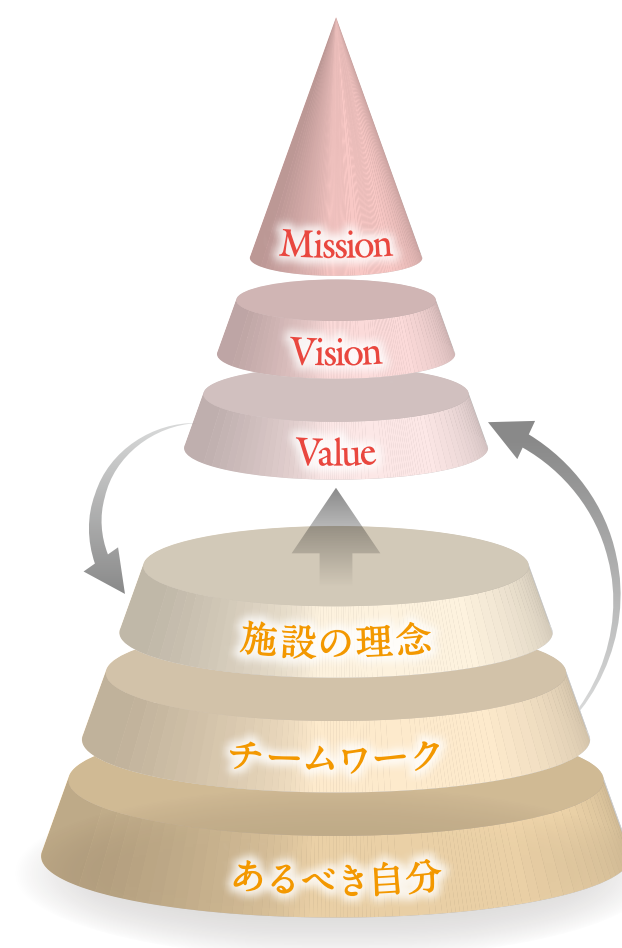
皆さんに期待することは、日々働く中で「自分自身のポジショニングを理解し、期待されている役割をしっかりと果たすこと」そして、「常にいいチームを作れるように努力すること」です。

一人ひとりがその役割をしっかりと果たし、そしていいチームを作ることができれば、自然とクライアントから期待されている価値を提供できるようになります。そしてそれが、自然に**施設理念の実現**に近づいていくことにつながるのです。

それぞれの施設理念が実現されてくると、健育会グループがグループ全体として「**クライアントの心を豊かにする介護施設**」であると理解されるようになり、それがクライアントの「健育会のようなグループが介護施設を作ってくれと安心だ」「健育会のようなグループがあれば、老後に不安を感じずに頑張れる」と思っただけになるでしょう。そして、ひいてはミッションである「**活力ある高齢化社会のサステナビリティを実現する**」の実現につながっていくのだと考えています。

このように、職員みなさんの毎日の働きぶりが、社会に貢献することにつながっていると理解してください。

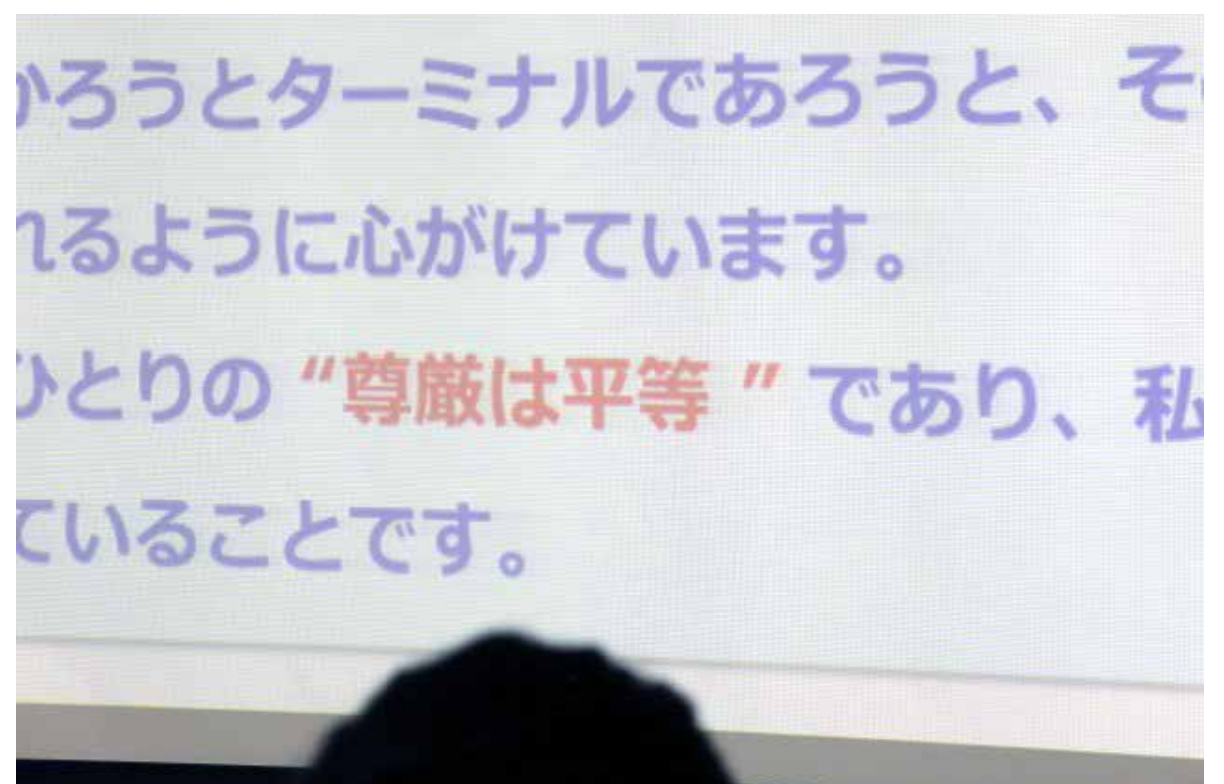
健育会グループ介護事業のMVVと施設理念



人間の尊厳は平等

どんな方であろうと、その人の尊厳だけは平等に扱わなければいけません。「人の命は平等」とよく言いますが、私は医師になってわずか数ヶ月で人の命は平等ではないという事例を体験しました。アメリカの場合はどちらかというと、お金でいい医療を買うということが出来ます。しかし日本の場合、たまたま行った病院に優れた医者がいたというラッキー・アンラッキーで、お金や貧富の差はあまり関係ありません。人の命は平等にすべきだと思いますが、決して平等に扱われていないのが現実です。

しかし、「**人間の尊厳**」だけは**平等に扱える**はずです。これは、健育会グループの文化です。





失敗を恐れずに、チャレンジを

もし皆さんの部下が「人間の尊厳は平等」ということに反した行動をしたら、しっかりと叱責して欲しいと考えています。叱ったことで何か問題が起こった時には、**理事長である私が全責任をとります。**

アメリカのトルーマン大統領は「The buck stops here.」という言葉のプレートをデスクにおいていたと言います。これは「仕事の最終責任は私にある、私が全責任を取る」ということです。私も同じことを皆さんに約束します。

皆さんが、「ご利用者のために」と取り組んだことで問題が起こったとしても、最終責任は私がとります。ですから安心して**ご利用者にとって良いと思うことに、常にチャレンジし続けて欲しい**と思っています。



健育会グループで介護事業に携わる職員の皆さん一人ひとりのチャレンジや頑張りが、介護事業を通しての社会貢献に結びついていくことをぜひ心に留めて下さい。